

大阪文化再発見

大阪の渡船 (後編)

渡船の安全を担う現場の活躍

前回の本欄では、今なお現役で運航している渡船についてご紹介しました。今回は、渡船の運航に関わる船長(※)の仕事についてご紹介したいと思います。

詳しくお話を伺うため、木津川に面した立売堀の大阪市建設局渡船事務所を訪ねました。取材当日は、年に2回実施する船舶総合訓練の日にあたり、今回のテーマは、船舶のエンジン調整の方法や荒天時の対応等でした。所長をはじめスタッフの方々70余名が勢揃いされ、まず、安全管理規定遵守の徹底についての確認がなされ、その後、不測の事態を想定したディーゼルエンジンの調整を実施。本番さながらの訓練で、エンジンの調整に汗を流されている姿が印象的でした。現場をよく知るこの道16年のベテラン門田勝博さん(39)にお話を伺いました。

各渡船の片道航海時間は、短いところで30秒、長くて3分程。潮の流れにより、それぞれ操作方法が違うようです。岸壁間94mの「甚兵衛渡船」は、潮の流れが速いため、着岸には十分注意していると言います。一方「天保山渡船」の航路は、大型船の運航が多く、大波が立ちやすく、操作には緊張を伴うようです。渡船は、短距離運航なので、キール(船底の形状)が平らな構造上、海面の抵抗が少なく、滑りやすいため船体が揺れやすいそうです。揺れを少なくするために、狭い川幅を大きくS字を描き着岸しなければならず、これは熟練のテクニックが必要とのことでした。利用者の方々に対しても、細やかな配慮が感じられました。例えば、乗下船時には、台船(浮き船)と船の間に隙間が生じます。車椅子の方には、両サイドからの介助を実施しましたが、最近では、電動車椅子が多く、持ち上げるには重く、特別に製作したステップを敷いて誘導しています。また、船内の上部にスチール製の手摺を設置し、体の揺れを軽くするな



千本松渡船にて。一日の勤めを終え、家路に向かう人たち

どの工夫がなされているとの事です。これらは利用者として直接接する船長が、日々感じ「安全第一優先」の意識のもと、独自に設置されたと伺いました。乗船時間が短いため、利用者として船長が話しをする場面は滅多にないですが、乗下船時、互いにアイコンタクトを交わすのを見る度、清々しい気持ちになります。台風時は渡船場にある風速計を確認し、平均風速が15mになると欠航すること。欠航情報は、最寄りの駅や施設にチラシを掲示し、利用者に伝えます。台風が来ると気圧が低くなり、潮位が上昇します。

そのため現場では、棧橋を滑車で吊り上げ、台船と護岸をワイヤーとロープでつなぎ留め、風が弱くなつたときに出航できるよう準備されているとのことでした。有事の際は、気象学の知識と緊急時の訓練が役立つとのこと。その他、各渡船場の安全管理は欠かせないようです。以前、運航中に溺れている人を発見し、救助したことがあるそうです。水辺は、子供にとっては格好の遊び場。今夏も、あたたかい目で子供の安全も見守ってくれることでしょう。

渡船は、主に日々の交通手段として利用されている方が多いようですが、忙しい日常から離れ、一度ゆっくり利用してみたいかがでしょうか。例えば、「木津川渡船」の船内には、手作りの『船員が考えた渡船巡りコース』が掲げられています。木津川渡船は船町渡船、鶴町中央公園、鶴町北公園、千歳渡船、北村南公園を巡るコースと、大正内港展台、千島公園、落合上渡船、落合下渡船、平尾亥開公園、千本松渡船を巡るコースの2コースが紹介されています。私自身、2コースとも辿ってみました。千歳渡船から望む夕日の美しさに魅了されました。爽やかな海風を受け、この夏、運河のまち大正区の知られざる一面を発見するというのも良いのではないのでしょうか。各渡船場では、リーフレット「大阪の渡し場 いま むかし」も配布されています。江戸時代からの変わらぬ交通手段、渡船。郷愁の想いを抱きつつ、渡船のはしごりをしながら、心楽しいひとときを過ごされては如何でしょうか。

※ 渡船では、船の操作など運航に携わる全ての方が船長と呼ばれています。



船舶総合訓練 機関整備講習

大阪市建設局 渡船事務所

電話 06-6531-0548